
何かが足りない。『H×H二次創作』

uturu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何かが足りない。『H×H二次創作』

【Nコード】

N9888X

【作者名】

uturu

【あらすじ】

- - 気が付くと、俺は「俺」じゃなかった!?

舞台は、弱者は死ぬといどこかの世紀末並にヤバい富樫ワールド。

主人公は、原作知識という名前の未来の情報を持つ少年ジスパ。

狂った世界と狂った人間。

これは、そんな二つが奏でるラブソングだ。

9話の後書きに補足を追加しました。

ある日、気が付くと俺はジスパであった。
毎日念の修行をしたり、ニッケスやゲンスルー達とカード集めを
したり、仲間を集めたりしてた。

いつからそうであったのか、分からない。

俺は確かに日本人だった。

それが、今はジスパになっている。

俺は三島伊澄であって、ジスパではない筈なのに。

混ざっている。

そう表現するのが、的確かもしれない。

三島伊澄である「俺」とジスパである「オレ」が混ざって出来た
存在。

それが、「俺」だ。

「オレ」ではない、「俺」であるジスパ。

言葉で表すのは難しいけど、今の「俺」は三島伊澄ではなく、か
とって、「オレ」もジスパではない。

「俺」がジスパなのだ。

そのことを理解した俺は、「H×H」という漫画を含む三島伊澄
の記憶を完全に取り戻した。

自分が「ジスパ」という、ゲンスルーに殺されるキャラクターだ
ということも。

俺が殺される？目の前で穏やかに笑っているこいつに？

俺は動揺した。今まで仲間だと思っていた奴が、実は裏切り者で、
それも俺を含めたハメ組の全員が殺されるということに。

信じていた仲間裏切られる、悲しみや怒り。死ぬかもしれないという恐怖。

そんな複雑な感情が自身の中に渦巻いていた。

でも、俺は何故か冷静だった。

客観的に見て、何をすれば「俺」にとって一番得か、そう考える自分がいるのだ。

選択肢は4つだ。

全てを捨てて、逃げるか。

ゲンスルーに取引を持ちかけるか。

この情報を他の組に売って、金を手にするか。

もしくは、仲間を救う為に協力を依頼するか。

馬鹿な、仲間を見捨てるなんてあり得ない。それでも、お前は血の通った人間か？

いや、落ち着けよ「俺」。本当に大切な物は何か、冷静に考えれば、答えは見えてくるだろう？

「……ニツケス」

仲間だった男の名前を呼ぶ。

「ん？なんだ？」

「悪い。現実世界に用事を思い出したから、少し戻る。だから、フリーポケットの中預かってくれないか。ついでに、指定ポケットも」

「おいおい、急にどうしたんだ」

「本当にすまない。実は、明日は妹の命日でな。それをついさつき思い出したんだよ。長年、会いに行つてやれなかったから、せめて明日くらいはな……」

「……そうか、分かった。妹さんによろしくな。ブック」

「ああ、ありがとう。突然、済まない。ブック」

バインダーの中に入っている離脱以外のカードを、ニケッスへ渡す。

「じゃあ、行ってくる。またな。『離脱』使用」

そうして、俺はグリードアイランドから去った。

騙される方が悪い。そうだろうか？ゲンスルー。

原作開始の3年前。

1996年の出来事だった。

グリードアイランドを去った俺は、野蛮人の聖地「天空闘技場」へと来ていた。

地上251階、高さ991mの闘技場は流石に壮観であり、自身が冷めていることを自覚している俺でも、凄いなと感じる。

受付には既に長蛇の列が出来ていて、建物の外ですら、人が並んでいた。

おいおい、これに加わるのか。

先頭に並んでいる人間を脅して入る。という選択肢もなくはないが、そんなことをして入場禁止を喰らうと面倒なので、普通に最後尾に並ぶ。

待つこと3時間。途中、屋台で食べ物を買ったり、念の修行をして時間を潰してようやく建物の中に入ることが出来た。

入って直ぐの場所に受付があり、そこで必要事項を紙に記入するように言われた。

日本語で書かないように、注意しながら書かないとな。

名前の欄に「ジスパ・コレア」とハンター文字で書いて、生年月日、闘技場経験の有無、格闘技経験、格闘スキルと空白を埋める。格闘技歴は、嘘だけど10年でいいよな。キルアやゴンならともかく、16歳の俺なら不自然でないし。

書き終わって提出すると、今日は試合に出るかと聞かれたので肯定すると、そのまま控室に案内された。

マッチョばかりの汗臭い部屋で待っていると、名前が呼ばれる。

『1678番、ジスパ・コレア様。1345番、ゴンド様。4階3番会場にお越し下さい』

どうやら、俺の相手はゴンドさんらしい。とりあえず、自分の実力を正確に把握する為、念を使わずどこまで行けるか試してみよう。纏を解いて、会場に行く。

「ゲへへへ、なんだよ。俺の相手はこんなちっちゃい兄さんかよ。参ったぜ」

ハゲダルマが何か言っているようだ。

とりあえずスルーしていると、審判が試合開始させた。

相手は、此方を舐めきっているのか真正面から突っ込んでくる。

バカか、こいつ？

見たところ、念能力者でもないようだし、油断し過ぎ。

相手の拳を躲して、カウンター気味で腹に手加減した蹴りを打ち込む。

「ぐはあっ」

蛙が潰れたような悲鳴を上げて、ハゲダルマは会場の隅まで転がっていった。

「よわっ」

軽く蹴ってこれなら、今の俺の筋力はゾルティック家の試しの門を一つ開けたゴン並みにあるということだろうか。

ハメ組にいたのだから、はっきり言って戦闘力は期待してなかったが、これは嬉しい情報だ。

「1678番、ジスパ・コレアの勝利。君は50階へ進みなさい」

審判が俺の勝ちを宣言して、50階クラスへの昇格を言い渡して

くる。

まあ、初めてだからこんなものだろう。

会場を出ると、エレベーターに乗って50階へ向かった。

受付で、ファイトマネーの100ジエニーを受け取り、近くにあった自販でお茶を買う。銘柄は、「おい。おい。おい。お茶」だった。

『1678番、ジスパ・コレア様。1067番、ギター様。52階4番会場へお越し下さい』

まったりお茶を飲んでいると、名前を呼ばれる。

普通は一日一試合だが、無傷で勝った為もう一試合組まれたのだ。150階までは早く行きたいから、俺としても調度良い。

会場へ行くと、ちっさいおっさんが待っていた。

念能力者ではないが、さっきの奴よりは強そう感じた。

「試合始めっ」

先程の試合を見ていたのか、おっさんは警戒して中々近づいてこない。なら、こちらからいかせてもらおう。

普通ではない速さで、相手の後ろへと回る。

「なっ」

対戦相手が目の前から消えたことに驚いたおっさんを、後ろから蹴り倒す。

地面に激突した相手はそのまま気絶したようで、10カウントを数えても起き上がって来なかった。

「1678番、ジスパ・コレアの勝利」

ふー。これで60階に到達か。順調だな。

会場を後にして、受付へ向かう。

どこかに宿はないかと訪ねると、近くにあるオススメのホテルを紹介してもらった。

ホテルで念の修行をして、俺は今日を終えた。

2週間が経った。

俺は100階辺りを上がった、降りたりしている。

50階クラスを無傷で勝利して楽勝だと、このまま勢いよく上がって行こうとした俺を待っていたのは、100階クラスの洗礼だった。

強さでいえば、彼らは念を使っていない俺より格下だ。

しかし、彼らの執念は俺より上だった。

試合に勝つために、ありとあらゆる手を使ってくる。目隠し、金玉潰し、この程度ならまだマシな方だ。試合が始まる前に、食事に毒を盛ってきたり、大人数を引き連れて集団リンチしてきたり、果てには不戦敗になるように道を塞いだり、とにかく卑怯極まりない。4度目の不戦敗になったときなんかは、堪忍袋の尾が切れて邪魔をした奴等を全員病院送りにしてしまった。

若さゆえの過ちという奴だ。反省はまったくしていないが。

それ以来、奴等が“物理的”に俺の邪魔をすることはなくなった。

これで、やっと150階クラスに行ける。そう思った。

が、俺の認識ははつきり言って、甘かったらしい。それは、もう砂糖をぶちこんだシロップのように。

100階クラスの闘士の本気は、ここからだった。

試合が間近に迫った、控室。

知らない男がやって来た。

暑苦しい顔に鼻水やら、涙やら、涎やらをくっ付けて。

無視していると、目の前の男は土下座した。

そして、困惑する俺を尻目に勝手に語る。

曰く、「母親が病気で金が必要。自分の母親は病気がちで入院生活を送っている。その入院生活は自分の闘技場のファイトマネーで稼いでおり、今月は負け越したため治療費が払えない。母は体が弱く、病院を追い出されると死んでしまう。だから、今回だけは自分に勝ちを譲って欲しい」と。

それに対する俺の返答は、「へー」だった。

どこの喜劇だよ、と思った。いや、悲劇か？まあ、どうでもいいそんなこと。無視して去ろうとする俺に、男はしつこく足を掴んでくる。

うざいなー。

蹴って男を剥がそうとすると、いつの間にか集まっていた野次馬が俺を罵り出した。

「人でなし」「鬼」「悪魔」「極悪人」「人間の屑」「死ぬ害虫」「あんたには、人の心というものはないのか」

集団の盛大な罵倒コール。

え？なに、これ？俺が悪いのか？

鬱陶しくなって、俺は今回の勝ちを譲った。

また次勝てばいいと、思ったから。

でも、それが間違いだった。

あいつ等は毎日来る。

そして、どいつもこいつもアホの一つ覚えみたいに言うのだ。

母が病気で金が必要、妹が怪我をして金が必要、恋人が事故で金が必要、借金を返すために金が必要。

日に日にしつこさは増していく。

そんなことがズルズル続いて、俺は100階で止まっていた。

あー、同情作戦とかうぜえ。

試合前に来て、また土下座をしてくる男。
もう、なんかめんどくさい。

「ぐはっ」

男の足を踏み潰す。

「がはっ」

続いて、腕を潰す。

そして、地面をのたうちまわっている男の頭を踏んで言う。

「次はないから」

俺は、少し予定より遅れたが150階へ到達することが出来た。

でも、思う。

もう一度と、100階クラスには行きたくない。

150階クラスに上がってから、半年が経った。

183階第7会場。

俺は才能という厚い壁に阻まれていた。

『あーっと、ジスパ選手。またまたクリティカルヒットを喰らったああああ。これで、対戦相手のアラン選手は9ポイントゲットオオオオオ。逆に追い込まれたジスパ選手っ、ここから再逆転なるかー？』

強い。

念を使わず、純粋な戦闘技術だけで戦っている俺は苦戦していた。

もう後がない。次に一撃で喰らえばそれで終わる。

14歳で念を習うまで、この身体一つで裏社会を生き抜いてきた。だから、サバットを使った戦闘技術には、それなりの自信があった。身体能力の高さだって、負けはしなれなかった。

しかし

『仕掛けたジスパ選手っ、アラン選手に向かって蹴りかかる。これは、サバットの“シャッセ”かああああ？ジスパ選手がよく使う技だっ。アラン選手の頭部へ決まっ、おーっと、アラン選手左腕で受け止めたああああ。そして、そのままジスパ選手に向かって右のストレート。クリティカルヒット、アラン選手の勝利だああああ』

……負けた。

これで、また170階へ降格か。

あーあ、俺って才能無いのかな。

天空場の闘士なんて、一部を除いて雑魚ばかりだと思っていたのに……。

部屋に戻って、先程の戦いを録画しておいたビデオを見ながら、分析する。

目に留まったのは、やはり最後のシーン。

やはり蹴りでなく、パンチでいくべきだったか。

俺には、焦りが出ると蹴り一辺倒になる癖がある。どうやら今回もまた、それが出てしまったらしい。

銃やナイフを使えない200階以下では、普段使わない手技も使う必要が出てくる。

この半年の間で、念の修行と平行して、苦手の手技を磨いてきた。そのおかげか、最初はほとんど勝てなかったこのクラスで、今ではイーブンくらいまで成績を保てるようになった。

それでも、未だ確実に勝てるわけではない。もっと、努力と時間が必要だ。

にしても……

あのキルアが、たとえば6歳でも190階をクリアするのに1年10カ月掛かったことは伊達じゃないらしい。

それほど、150階以上の闘士は強い。

一人一人が何かしらの武術の達人であり、身体能力も高い。

これを、当時12歳のキルアとゴンがたとえ怪力を使ったとしても、ストリート勝ちしたんだから、本当に才能って残酷だ。自分の才能の無さを思い知らされる。

そろそろ、「発」を作ったほうがいいかもしれない。

自身に戦闘の才能がないことが分かり、俺は最近、念能力の集大成といえる技術「発」について考えるようになっていた。

水見式で確認したところ、俺は放出系だった。そして、オレは未だ「発」を作っていない。

オレは、念についてほとんど知識を持っていなかった。だが、俺は違う。

知識だけなら、超一流ハンターだ。才能がないなら、それを覆す何かを考えればいい。

どのような能力にするか毎日考えてはいる。しかし、これといった自身に合ったものが思いつかない。

望むのは、「たとえ相手が自身より格上でも、勝利を収めることが出来る能力」

分相応の分かってる。でも、欲しい。俺にとっての、ただ一つの才能が。

化け物共と戦えるようになる為には、それしかないと思うから。

まだ、時間はある。

ここは一つ気合入れて、頑張ろうかな。

天空闘技場に来てから、1年が経った。

色々あつたけど、あんまり語ることはない。強いていえば、髪を染めたことくらいだろうか。金髪ツーブロックは趣味じゃなかったので、茶髪ロン毛に変えた。天空闘技場の施設って、本当に便利だ。なんでもあるし。吉野家はないけど。

ところで皆は牛丼は何派？

俺は勿論、すき家っ！あそこのチーズー辛っておいしいよね。

安いし、美味しいし、早いっ！

もう完璧だよね。

一年掛かってようやく150階〜190階クラスを確実に勝てるようになった俺は、戦闘技術を更に高める為に、日によって右腕を使わなかったり、左足を使わなかったりしていた。

常に、五体満足で戦えるとは限らないしね。そういうのも大事だと思う。役に立つか、分からないけど。

最近、念の修行に専念している。俺の才能では、戦闘技術は限界値に達してしまつたみたいだし。これ以上やっても、時間の無駄だと思つたから。

特に集中的にやっているのは、点と鍊。それと、応用では円と周。まあ、基本的に全部やっているけど、放出系の俺はどうやら円や周と相性がいいみたいだし、今考えている「発」はそれらの技術を多用するから。

後は、系統別でいえば放出、操作、強化とバランスよくやってい

る。

基本的に、念の修行方法としては、ビスケがゴン達に指導していたやり方を思い出しながら、忘れていた所は自身で補充して、という感じで。

最低半年はこのまま200階に上がらず、念の修行を続けようと思う。

200階闘士の最低ランクを原作でゴン達が戦っていた新人潰しだ仮定とすると、最低でも彼らを「発」なしで圧倒できる程には力を付けていたいし。

それと、最近ヒソカを200階クラスで見かけた。

カメラを通して見ただけであるが、それでも直ぐに分かったくらいに物凄い禍々しいオーラをしていた。

ヒソカがカメラ越しにこちらを見た瞬間なんか、身体の震えが止まらなかった。

あれは人間じゃない。人の皮を被った何かだ。それくらい、異常だった。

戦っても、絶対に勝てない。正面から向かえば、確実に殺される。

この先、200階クラスで戦うときは、あいつがいなくなるときにすむしかないだろう。死にたくなければ。

あーあ、あんな怪物がいるんじゃない、この世界は駄目だよなー。

ここは人間が暮らす世界なんだから、化け物はいちやいけなんだ。だから、さっさと死んで欲しい。

闘技場で溜めたお金でゾルティックに暗殺頼もうかな？

何億くらいなんだろうか？

10億？20億？

いや、そもそもゾルティック家とアポを取ることが無理か。近寄
ったら、殺されそうだし。

ホント、世知辛い世の中だ。

俺達一般人にとっては、特に。

インターネットでヒソカ暗殺の仲間でも、募ろうかな？

なーんて……ね。

6 (前書き)

5話の一部を改訂しました。

松屋 すき家

天空闘技場に来てから、1年と8か月。

この間は、新しい服を買った。

ファー付き黒のジャケットと灰色のインナー、紺色のジーンズと一式。

最近、寒くなってきたから、調度良かった。戦って敗れてもいいように、予備も買ったし。お金持ちっていいよね。前は買えなかったブランド品が簡単に手に入る。やっぱり、世の中はお金なんだろうか。厳しいなー、現実って。

あ、そうそう。俺も遂に200階の住人になった。

190階で勝って2億貰い、暖かくなった懷で、怖い新人ハンターさんと会わないように、細心の注意を払って登録した。

戦う日時は、登録してから二、三か月後。それまでは、念の修行に専念するつもりだ。他にやることもあるし、念能力者との戦いはとりあえず後でいい。今は、自力をつけるのが先決だから。

後、最近カストロが200階に上がってきた。

原作の6巻で、ヒソカに殺された“ダブル”の彼である。

念は覚えていない筈なのに、下手な念能力者なんかよりはずっと、綺麗なオーラの流れだったので驚いた。

しかも、これまでの全ての試合で、相手を一撃で倒してきたらしい。

解説者が、無敗の一撃王子とか言っていたし、疑いよりの無い事実なのだろう。

彼女のネーミングセンスには、疑問を持ったが。

そして、実際に試合を見て思った。

彼は、天才だと。

そりゃ、ヒソカに目を付けられるわけだよな。

俺なんか念なしたと逆立ちしたって、勝てそうにない。いいよな
ー、才能がある奴は。本当に、羨ましいよ。

でも、それだけに勿体ない気がする。

カストロが自身の才能を無駄にしていなければ、ヒソカにだって
勝てたかもしれないのに。

なんで、誰か彼に念を教えてやろうと思わなかったんだろう？

まあ、どうでもいいか。そんなこと。

結局は、運が悪かった。

それだけのことなんだろうし。

「プルルッ、プルルルル」

電話だ。

液晶画面に映った名前は、最近よく会っている“彼女”

「もしもし、何か用？……え？今から？……ああ、分かった。急いで行くよ」

200階クラスの豪華な部屋で、贅沢な日々を送るようになって二カ月。

この間は、逆ナンしてきた女の子とピアスを買いにいった。ブランドもので、1千万もした超高級品だ。

付けていると、金持ち気分になれるという優れものである。

左耳に輝くピアスが今日も眩しい。

さーて、今日はいよいよヒソカ対カストロが対決する日だ。

まあ、カストロの負けは決まっているが、ヒソカが青い果実だと認めた素質の片鱗が今日で見られると思うと、ワクワクするね。

絶対に勝てない試合の中で、狂った殺人鬼相手に彼は何を見せてくれるのだろうか。

楽しみだ。

「発」で使う神字の勉強に一区切り付けて、会場へ向かう。

「あつ、ジスパくん。こっちこっち」

「おはよう。ソレーヌ、早いね」

「うん、おはよう。楽しみだったから、早く来ちゃったの」

彼女の名前は、ソレーヌ。

この間知り合った女の子だ。本来一緒に見るはずだった“彼女”

が仕事で来れなくなり、チケットを競売に出そうかと思っていた所、チケットを買えなくて落ち込んでいたソレーヌにこれ上げるから一緒に見に行かない？と誘った所、O・Kを貰ったのだ。

ヒソカ戦は人気なので高いが、別に金には困っていないし。可愛い子と知り合いになれるなら、損ではない。

あの“ヒソカ”が縁で繋がる関係というのも、面白いしね。

圧倒的な実力を見せつけるヒソカと無敗で200階まで駆け上がってきたカストロとの対戦ということで、会場の熱気は凄まじかった。

200階闘士の権限がなかったら、俺もチケットを手に入れることは出来なかったかもしれないな。それほどに、観客達は盛り上がっている。

ソレーヌと話しながら、試合が始まるのを待っていると、ヒソカ対カストロの賭けのオッズが発表された。

1・0001対587・92でヒソカ有利。まあ、当然かな。むしろ、カストロに賭けた奴がいることに驚きだ。きつと、どこかの大穴狙いの馬鹿がやったんだろうが。

どちらが勝つかを賭ける普通の試合と違って、カストロが200階クラスでは初戦ということや、更に相手がヒソカということ。その二つの要因で、この試合はどちらが勝つではなく、ヒソカがどうやって勝つかという事に焦点が当たっている。

K・O勝ちか、それともポイント勝ちか。ポイント勝ちならどういふ点が付くか。

ちなみに、ヒソカの成績は4勝1敗。3K・Oで、K・Oした相手は殺している。よって、ヒソカの試合はK・O＝死という認識が

広がっているが……。

「あっ、発表された」

その勝ち方に対するオッズはというと。

1・4対0・8

うわっ、残酷な結果が出たな。

客の四分の一はカストロが死ぬと知っているのか。ははっ、狂つてる。

「あっ、カストロが出てきたよ。うわっ、本当にあんな服してたんだ」。おもしろーい」

「……………」

カストロの服は、原作で来ていた“死角を隠すため”のヒラヒラだ。

漫画で見たときは特に何も感じなかったけど、直接見るとやっぱり変だ。それは、この世界の住人も同じらしい。

あ、こら指を指すな。指を。周りの人間が見てるだろ。俺まで、恥ずかしいじゃないか。

まったたく……。

一人の人間が立つには広すぎるその場所で、カストロは静かに目を閉じて佇んでいる。

“点”をしているのだろうか、カストロの心理状況を表すように、彼のオーラは一切の澱みなく流れている。これだから、天才って奴

は嫌いだよ。

「きゃっ、きゃっーきゃー。ヒソカ、キタアアー」

ソレーヌの悲鳴のような歓声が響く。

ヒソカが現れたらしい。

「わっ、すごいよっ。すごい。本物だ。生ヒソカだよ。ピエロだあー。マジピエロッ（笑）」

にしても、隣りに座っているソレーヌの喜びようが半端ない。

どうやら、彼女はヒソカの大ファンだったようだ。天空闘技場では、狂気的な試合をするヒソカのファンも少なくはない。実際に、見たのは初めてだが。

興奮が収まらないのか、俺に抱きついてきた。

役得であるが、……鼻息が荒い。お前は、少し落ち着け。

カストロが念を使えないことを知っているか、ヒソカは纏をしないかった。オーラを垂れ流している状態だ。念の存在を知らない相手に、念は必要ないということだろうか？流石、狂人。余裕だな。

カストロは対戦相手が来たことで瞑想を止めて構えを取った。

そして、ヒソカを正面から睨みつけたいる。おいおい、どんな命知らずだよ。

ヒソカはそれを見て、より一層笑みを深めるだけ。……いや、よく見ると一部がもっこりしているような気がしないでもないが、それについてはスルーしよう。俺の精神衛生上の為に。

審判の登場で、両者が改めて向き合う。

静寂。

両者が戦闘態勢に入ったことで、会場の空気が静まり変える。

「カストロ×ヒソカ。はあっはあっ」

……ただ一人を除いて。

「試合開始っ」

審判の掛け声と共に、勝者が決まっている試合が始まる。

「ハアアッ！」

カストロが先制攻撃。

攻撃は最大の防御であると言わんばかりに、ヒソカに突進していき。

速いっ

念を覚えてないにしては、かなりのスピードだ。念なしの俺以上はある。

でも、それまでだ。

単純過ぎる攻撃では、ヒソカに当てることは出来ない。

カストロの右腕の肘鉄が外れる。

そして、体勢を崩したところカストロに、ヒソカが裏拳で顔面を殴った。

「ぐあっ」

ただ、上手く受け流したのか、ほとんどダメージを受けていない

カストロは、そのまま、反転して蹴りかかる。

ヒソカは脇腹に蹴りを受けるも、強引に左腕でカストロに殴り掛かる。

が、今度はカストロもヒソカの攻撃を読んでいたのか、バツクステップして、回避した。

「ヒソカ、クリティカルヒット。カストロ、クリーンヒット」

「なななんとー、200階初戦のカストロ選手っ、あのヒソカ選手と互角の戦いを繰り広げております。凄いつ、凄すぎるっ。誰がこんなことを予想していたでしょうっかっ」

ほんと、凄いやね。

もしかしたら、彼なら本当に……。

今の攻防は、そう思わせるだけの魅力がある。

ヒートアップする観客を背に、カストロは息を大きく吐いて、構え直した。

「これで終わりだっ、ヒソカッ」

彼はそう言うと、先程よりさらに早いスピードでヒソカの元へ行き、一瞬で後ろを取った。

「虎咬拳っ」

原作でお馴染みの、両手を虎の牙に見立てたカストロの必殺技がヒソカに襲い掛かる。

決まった。

流石のヒソカといえど、これを躲すのは無理だ。

そして、カストロの牙がヒソカを食い殺そうとした、その瞬間。

「
」

ヒソカの禍々しいオーラがその姿を現した。

錬？ いや、纏かつ。

カストロの攻撃がヒソカの背中に当たる。

凄まじい勢いで、地面へと転がっていくヒソカ。

「ヒソカ、ダウン。カストロのクリティカルヒットッ」

あの“ヒソカ”がダウンを奪われた？

そのことに、歓声が沸く。

「カストロ選手の18番、虎咬拳が決まったあああああああつ。
未だポイントを取られたことがないヒソカ選手の、まさかのダウン
ですっ」

もしかしたら、このままカストロがヒソカに勝つのではないか？
恐らく、多くの観客がそう思った筈だ。

「
くくくっ」

ーヒソカの嗤う声を聞くまでは。

愉悦の笑みを顔に張り付けて、ヒソカがゆっくりと立ち上がった。無傷だ。

観客の驚く声が聞こえる。

まあ、そうだろうな。

カストロのあの攻撃を食らって、無傷なんて普通なら有り得ない。でも、事実として、彼はほぼ反射的に行った纏によって、たいしてダメージを負っていない。

禍々しいオーラを纏っているヒソカに、会場が異様な雰囲気包まれる。

呼吸すら止まった、ゼロの世界。

既に、先程のようなカストロ優勢の空気はなかった。

あるのは、明確になった強者と弱者の選別。

それに気付いたカストロも、後ろへ下がる。

しかし、彼はヒソカの持つ禍々しいオーラに中てられたのか、既に虫の息だ。

勝負は見えていた。

死神が嗤う。

「キミは、今殺すには惜しい」

それが最後の言葉だった。

ヒソカは動けない状態のカストロを殴り飛ばす。会場の壁に激突して、気を失うカストロ。

「……まだまだ青い」

そう呟くと、ヒソカは会場から去った。

「ヒソカ、クリティカルヒット。カストロダウン。勝者ヒソカのK・O勝ちっ」

再び静まりかえった会場が、審判の一声によって騒ぎ出す。

「カ、カストロ選手は大丈夫なのでしょうか……」

「彼を医務室に運べっ。早くしないと、間に合わなくなるぞっ」

そんなに慌てなくても、彼は死なないよ。

ヒソカが認めたんだからね。

喉の渴きを癒す為、ドリンクを飲む。

銘柄は、コラ・コーラ。

にしても、凄かったなー。あれが、天才同士の戦いって奴か。俺では絶対に真似出来ないや。いいよねー。才能があるって。

「ソレーヌ、今日はたのし……ソレーヌ？」

俯いたまま、肩を震わせているソレーヌ。

あれ？どうしたんだろ？

もしかして、ヒソカの戦いを見て怖くなった？

なんだ、可愛いところあるじゃん。

「今日は、もう帰って寝なよ。送ってくから」

俺はソレーヌを彼女の部屋の近くまで送り届けると、そのまま部屋に戻った。

あー、今日は楽しかったなー。

7 (後書き)

プロローグの間違いを訂正しました。
ニッケル ニッケス。

8 (前書き)

6話と7話の間に消えた、語られなかった話です。

「遅いじゃない。こんな可愛い女の子を待たせるって、男としてどうなの」

「まだ、君が電話してから五分しか経ってないよ」

二百階闘士とは、何か？

勝利すると、多額のファイトマネーを手にすることが出来る、それまでの百九十階クラスとは違って、得ることが出来るのは武闘家としての名誉のみ。

割に合わない。

そう思っているのは、ジスパだけではないだろう。

二億という大金を貰った後では、特にそう感じた闘士達も多い筈だ。

しかし、実際に二百階にいる闘士からの苦情はない。

それは何故か？

理由と一部としては、強敵との戦いを目的にしている野蛮人はそもそも不満なんか感じないし、他の奴等にしたらって、念による洗礼でそんなことを気にする余裕は無くなるから。

「まっ、早く来ようとした努力が見えるから、許してあげるわ。それより、あんた昨日のは一体何？答えしだいでは、許さないわよ」

「だから、昨日のは勘違いだって言ってるだろ。百九十階までの戦いを見て、ファンになったって言ってくれたから、少し会話しただけ。君の思っているようなことは、何一つしていないよ」

「ハアアアア？そんな嘘信じると思ってるの。昨日あんたの部屋

から出てきたあの娘、髪が濡れてたじゃないつ。それに、じゃあどうして直ぐに部屋のドアを開けなかったのよっ」

「ああ、それは彼女がコーヒーを頭から被ってしまってたね。服を洗濯するついでにシャワーを浴びていたのさ。すぐに出れなかったのは、彼女が服を着替えていたから」

でも、実はそれ以外に二百階闘士が金が出ないことに文句を言わない大きな要因がある。

それは、女にモテるようになるから。

笑っちゃうような理由かもしないけど、今まで女と無縁な人生を送ってきた武闘家は案外多い。

だから、二百階に上がった途端、降って湧いてきた人生初のモテ期に気分が有頂天になって、お金が貰えないことへの不満が一気に解消される。

金が貰えないことにグチグチ言うより、明日はどの娘と遊ぼうかって考えた方が、人生ハッピーだしね。

女達が、百九十階までで溜めた金目当てで近寄ってきていることも知らずに、彼らは猿みたいに盛っているわけだ。

二百階クラスの本当の利点に、気付かないまま

「ふーん、そんなふざけた態度を取るんだったら、こっちは別れたっていいのよ」

「それは困る。君は、俺にとって必要な存在だからね」

今までのどこか道化染みた態度を止めて、ジスパは真剣な表情で彼女 二百階クラスの受付嬢、レイナを見つめる。

「だったら、態度で示しなさいよ。私を本当に必要としているのなら、誠意つてもんがあるでしょ」

「分かってるって。はい、これ」

ジスパはそう言って、ジャケットのポケットからある物を取り出す。

高級そうな包装紙に包まれたそれは、五百万^{ジヘー}のネックレス。

少し前に、彼女とデートした時に「これいいなー」と小さくそれでもジスパにはぎりぎり聞こえる程度の大きさだった。で咳いたのを、彼はこういう時の為に手に入れていたのだ。

「きゃっー、やったあ。これ、欲しかったんだー。ありがとっ、私のダーリン」

包装紙を破り捨てて中身を確認したレイナは、嬉しそうにネックレスを見るとそのままジスパの頬にキスをした。

「ねっ、似合う?」

ネックレスを付けたレイナは、胸元にあるそれを手で転がしながら、ジスパに尋ねる。

「ああ、似合ってるよ」

それを笑って褒めるジスパ。

彼の褒め言葉に、レイナも満更でもなさそうにする。

機嫌は直ったみたいだな。現金な女だ。

「プルルッ、プルルルル」

電話のアラーム音。レイナの携帯電話からだ。

彼女は鞆から電話を取り出してアラームの音を止めると、時間を確認する。

「あつ、ごめん。お昼休み終わつたみたい。もう行かなきゃ」

「分かった。仕事頑張つて」

「ほつんど、ごめんね。今晚電話するからっ」

そう言つて、レイナはネックレスを大事そうに鞆の中にしまつと、そのまま仕事場へ戻つていった。

彼女が視界から消えるのを確認して、ジスパはレイナが食べたハンバーグセットの料金を払い、カフェを出る。

部屋へ帰る道。

辺りに誰もいないことを確認すると、ジスパは徐にジャケットの内ポケットから、一枚の紙を取り出す。

レイナが頬にキスした際、こつそりと彼のポケットに入れたものだ。

綺麗に折りたたまれた紙を開く。

そこには、二百階クラスの試合予定日が記されていた。

ヒソカ対カストロは来週か。

最も知りたかった試合の情報を確認すると、ジスパは紙をもう一

度綺麗に折りたたみ直して、内ポケットへと戻す。

ほんと、二百階って良い場所だね。

彼は自身の最初の相手となる人物を誰にしようかと考えがえながら、部屋へと続く道を歩いていった。

8 (後書き)

今回は少し文章の表現の仕方を変えてみました。
三人称？です。

次からは、また一人称に戻ります。

213階、第5会場。

俺は200階クラスで、最初の戦いを迎えようとしていた。

初戦の相手は、ギド。

原作でも、ゴンと戦った新人ハンターである。

既に200階クラスの洗礼を受けたのか、下半身が一本の棒になっていた。漫画で見たそれに近い格好だ。

『さーて、いよいよです。それでは、選手紹介と行きましようっ。』

まずは、ギド選手。200階初戦で敗れ、姿形がすっかり変わってしまったが、初勝利なるかっ！？今回は気合十分、杖を持つての参戦です。続いて、ジスパ選手。彼は、これが200階で初めての戦いになります。1試合とはいえ先輩のギド選手に、敗退率90%を超える200階の初戦をどうやって戦っていくのでしょうか！？』

アナウンサーは、俺の負けがまるで決まっているかのように話している。まあ、当然かな？この会場の誰も、俺が念を使えるなんて増してやギドに勝つなんて思っていないだろう。

好都合だ。

客の出足も少なく、先のヒソカ対カストロ戦と違い、まったく注目されていないこの試合なら、心置きなく試すことが出来る。

俺に念に対する考えは正しいのかどうかを。

『おーっと、賭けのオッズが発表されました。3・2対11・7。ギド選手の断然優勢ですっ』

レイナに頼んで5億Jほど俺に賭けてもらったから、彼女への分
け前を差し引いても50億Jほどの儲けか……。
天空闘技場の体質を利用した荒稼ぎが出来るの機会はそうないか
ら、しっかりと稼がせて貰わないとね。

「試合開始っ」

まずは、様子見。相手の出方を窺う。
勝負を急いでも、何の特にもならないから。

「ふふふ、お前は運が悪い」

仕掛けてくるのを待っていたら、ギドがなんか急に語り出した。
くぐもった声で、彼は言う。

「200階初戦の相手が、未だ手加減を覚えていない俺だとはなっ
その言葉と共に、ギドの杖に滑り込むように現れるいくつもの独
楽。」

彼は、腕を振るってそれらを会場に放った。

リングの上を縦横無尽に駆け回る独楽。

一つ一つに籠っているオーラは20といった所だろうか。練すら
知らない彼が込めたには、大した量だ。

最も、POPが14400の俺からしてみれば、微々たるもので
しかないけど。

「死ねっ」

此方に向かって襲いかかってくる、無数の独楽。

「……練」

オーラを垂れながした状態から、素早く纏に、そして練へ。纏から練への切り替えが見えない程の速さで、一気に爆発的にオーラを増やして独楽を弾き返す。

「なっ」

その驚きの声は果たして誰のものであったか？

目の前にいるギドか、それとも会場のどこかにいる念能力者か、もしくは実況をしているアナウンサーか。

誰もが驚くその中で、俺は確かに感じていた。

強者と弱者が入れ替わる瞬間、自身の心が満たされていく快感を。

「なっ、何故だっ！？ 何故、お前が念を使えるっ？ 200階の洗礼を受けていないお前がっ！」

俺が念を使えるという事実がそんなに信じられないのか、もしくは自身の勝ちが揺るがなかった試合で起こった予想外な出来事に動揺しているのか、ギドは先程の余裕が嘘のように焦っていた。

「はぁ？ 俺は念が使えないなんて一言も言っていないよ。ただ君が勝手に勘違いしただけでしょ」

我ながら、よく言うな！。

こうやって価値が裏返っていく瞬間を見たいが為に、念を隠していたというのにな。

「く、くそっ、だが例えお前が念を使えたとしても、それが勝利に繋がるわけではないっ。行け、独楽達よっ」

「はははっ」

「な、何が可笑しいっ!？」

「20」

「20?」

「君の独楽に籠っているオーラの量さ。ま、あくまで推定だけどね」

俺はそう言っつて、ジャケットの裏から二丁の拳銃を取り出す。
昔から使っているオレの愛用品だ。

「そして、俺の推定では君のPOPは500程度。さあ、君の限界を俺に見せてくれ」

銃の弾を周で覆い、30のオーラ量を込めた念弾で、会場を走り
回る独楽を壊していく。

『なっ、なんとっー、ジスパ選手、拳銃で独楽を壊していくっ!
すごい射撃の腕だあああああ。瞬く間に、ギド選手の全ての独楽
を撃破してしまいましたあああああああ』

「クリティカルヒット、ジスパッ」

壊した独楽の数は、5つ。

これで、ギドのPOPは1000減ったことになる。

さーで、何時まで持つかな？

「そ、そんな馬鹿なつ。俺の独楽がこんな簡単につ。……つそ、くそつ、くそおおおおおつ。こんなルーキーに、俺が負ける筈がないんだあああああ」

簡単に自身の愛用する武器を壊されたことで、激昂したギドは一気に10個以上の独楽を、今度は俺に向かって直接ぶつけてきた。

はっ、馬鹿な奴。冷静に考えれば、無作為に駆け回る10個以上の独楽全ての軌道を同時に読むことがどれほど難しいかなんて、簡単に分かるのにな。

「オーラの無駄使い、ご苦労さんっ」

真正面から跳んでくる独楽を、撃ち壊していく。対応できなかつた物は、練で防げばいい。焦る必要はない。落ち着いて、一つずつ。正確に。

「ギド選手が放った独楽を次々に壊していく、ジスパ選手つ。残り一つだけ。もう、勝負は決まったも同然かああああ!？」

これで、最後だ。

16個目の独楽を撃ち落とす。

『最後の独楽も撃破つ！これで、ジスパ選手完全撃破ですつ』

練をした合計時間が、5分 \equiv 300秒 \times 9 \equiv 2700

念弾を23発撃つたから(2発外した)23 \times 30 \equiv 690
消費したオーラは合計で、3390か。

俺になってから、初めての念能力者相手の実戦にしては、上出来かな？

9 (後書き)

4話にある文章を少し書き直しました。

変えた部分はほんの少しなので、多分分らないと思いますが、気づいて貰えると嬉しいです。

章の名前を変更しました。

番外編・1 幕間

間違いを訂正しました。

460 420

0.32 3.2

質問が出たので、主人公がギドの念を見抜いたことについての補足です。

? 錬の持続時間 = POP

? ゴンが最初に錬を持続出来た時間 = 2分

? 2分 = 120、よってゴンの初期POP = 120

? 念の修行をまともにしていないギドが、錬を10分以上持続できるとは考えにくい

? 10分以下 = 600秒以下、よってギドのPOPを600以下と推測

以上の点と自身の初期POPによって、主人公はギドのPOPを500程度と言いました。

この設定は次話以降でも使うので、何か意見とか貰えるとありがたいです。

「ヒソカに勝ちたくない？」

彼が私の病室に来て、最初に放った言葉は理解不能なものだった。

「君は、日常の定義について考えたことがあるかい？ 常にあることを、人は日常と言う。だけれど、果たして本当にそれは日常なのだろうか？ この世界には、非日常が日常のように潜んでいる。例えば、そう。念のようだね」

あの戦いに負けてから、私は変わった。

全治半年という大きな怪我を負い、武術家としての自身も失って、全てに絶望していた。

それらと引き換えに得た身体を纏う何かも、どうせ大したものではないと傲慢に決めつけて、その正体を知ろうとせず、窓から外の景色を眺めるだけの無意味な日々を過ごしていた。

そんな時だ。

彼が私の元を訪ねてきたのは。

「君がヒソカに負けたのは、君のせいじゃないよ。全ては、非日常を隠す強者のせいさ。だから、君は何も悪くないんだ。何故なら、念を知らなかった。ただ、それだけのことなんだから」

「念」とは、それを使えるだけで、才能も経験も覆すことが出来る。

だから、あの戦いで念の使い手であるヒソカに念を知らない私が

勝てる筈がなかったと、男は嘯く。

「カストロさん、貴女には才能がある。あのヒソカすらも超える念能力者としての才能が」

私には才能があると彼は言った。

名前も、その素性も、何も知らない男のいう事だ。

普段の私なら一笑して、終わるだろう。

だが絶対の自信を持っていた武術でヒソカに完敗したことや、実際にこうして私の身体を包み込むような暖かな存在が、それを終わらせなかった。

「俺と手を組んでみない？俺は君に念を教える。君はヒソカを倒す。どうだろう？悪くない提案だと思うんだけど」

「念」という存在を、私は知らなかった。

純粹に武術を極めるだけで最強になれると、信じて疑わなかったのだ。

しかし、それでは駄目だと、男が言う。

ヒソカは倒すには、念を覚えることが最低条件だと。

そうしなければ、君は舞台上上がることすら出来ずに、独りで踊り狂って自滅すると。

「まあ、名前も知らない人間の言う事をいきなり信じろっていうのも、無理な話だよな。分かった。じゃあ、一つ賭けをしない？」

何も答えない私に、男は不敵な笑みで宣言した。

明日、自分は200階で最初の戦いを迎える。その戦いで、対戦相手に1ポイントも取らせず、K・O勝ちを収めてみせる。そして、君の心に念という存在を刻み込んでみせよう。

「無理だと思っかい？ ははっ、君が心配することはないよ。何故ならこの世界には、まだ君の知らない日常がたくさん埋まっているのだから」

彼はそう言って、自身の名前を告げると病室から去った。

翌日、テレビで試合を見ていた私は、男の圧倒的な勝利を目にする。ポイントを取られないどころか、相手に身体を触れさせることも無い。正に文字通りの快勝だった。

「……」

テレビを消して、静かになった病室で、私は静かに目を閉じる。イメージするのは、あの男の姿。そして、初めて目にした念能力者同士の戦い。

身体が熱い。

全身に、オーラが満ちていく。

もし、私が「念」を使いこなすことができれば、ヒソカに勝つことも夢ではない。

そう思うと、自然と心が昂ぶった。

「ふふっ」

自然と笑みが零れる。

どうやらあの男の言うとおり、私は念という存在に魅せられてしまったようだ。

目を開く。

ヒソカに敗れて以来、決して終わることのなかった悪夢。

それが今日で終わる。そんな気がした。

ジスパは、チェスをしていた。

対戦相手はいない。

俗に言えば、一人チェスだ。

チェス盤の上には、既に駒が3つだけ。

黒のキングと、白のキング、白のナイト二つ。

そんな黒が追い詰められた状況で、ジスパは黒のナイトを新たにチェス盤に加える。

「現実つていうのはゲームと違って、どんなに追い詰められても逆転が可能だ。だから、俺はそんな現実が最高に大好きだよ」

舞台へ上がったのは、黒の騎士。

果たして彼女は状況を覆す一手に成れるのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9888x/>

何かが足りない。『H×H二次創作』

2011年11月19日23時37分発行